

伊勢湾台風と闘った人びと

表題は藤崎康夫『九月の祈り』六法出版社、1995年のサブタイトルである。毎年9月26日が近づくと、伊勢湾台風のことが気になる。そんなとき本書をたまたま手にした。名古屋市千種区の日和山にある名古屋地方気象台一戦後、軍の施設を移築し、周囲からつかい棒で補強してあるバラック建てで木造八角形の現業庁舎の2階では、台員たちが、超大型台風にならなえていた。写真左が昭和23年6月竣工の旧現業庁舎、右が大正11年12月竣工の本庁舎である。



本書は名古屋気象台の活動から始まる。伊勢湾台風による名古屋市の死者・行方不明者は1909人。児童で最も多くの犠牲者を出したのは、名古屋市立白水小学校（南区）で、全児童2340人（本校1596人、分校744人）のうち142人を亡くした。そのうち73人が柴田分校の児童たちだった。写真下は流木に埋まった伊勢湾台風後の南区柴田町。柴田分校(南区元柴田西町)は、本校(南区松下町)の約1キロ西にあり、翌年は、独立して柴田小学校になることが決定していた。真新しい二階建ての校舎も建ち、楽しい学校生活があった。分校から600メートルも南に行くと、天白川の堤防に出た。2年2組のクラス担任の瀬戸一彦先生は、春のやわらかな陽射しを浴びながら、クラスの児童と堤防でツクシを採ったりもした。まさか、その堤防が、一瞬のうちに決壊し、児童たちの生命を奪うとは。



流木に埋まった伊勢湾台風後の南区柴田町。柴田分校(南区元柴田西町)は、本校(南区松下町)の約1キロ西にあり、翌年は、独立して柴田小学校になることが決定していた。真新しい二階建ての校舎も建ち、楽しい学校生活があった。分校から600メートルも南に行くと、天白川の堤防に出た。2年2組のクラス担任の瀬戸一彦先生は、春のやわらかな陽射しを浴びながら、クラスの児童と堤防でツクシを採ったりもした。まさか、その堤防が、一瞬のうちに決壊し、児童たちの生命を奪うとは。



伊勢湾台風で、一瞬のうちに両親を失った児童は、愛知県だけで122人を数えた。そのうち19人は、名古屋市立白水小学校の児童たちだった。その後、孤児たちは、それぞれ親戚や施設、雇い主などのもとに引き取られ、新たな人生を歩いた。

〈お父さんは、私たちをだきかかえて、何もつかまらずに、流れていきました。ふと気がつくとお母さんがいません。私は「お父ちゃん、お母ちゃんがない。材木の下になった」とさげびましたが、どうしようもありません。

私は二度しずみました。二度目にしずんだ時に、思わず妹につかまっていた手をはなしてしまいました。しばらく流されていってそばを流れていた材木にしがみつきました。それから「お父ちゃーん、お母ちゃーん」と父母の名前をよびましたが、何の返事もありません・・・) (『伊勢湾台風誌』名古屋市立白水小学校発行)

私は二度しずみました。二度目にしずんだ時に、思わず妹につかまっていた手をはなしてしまいました。しばらく流されていってそばを流れていた材木にしがみつきました。それから「お父ちゃーん、お母ちゃーん」と父母の名前をよびましたが、何の返事もありません・・・) (『伊勢湾台風誌』名古屋市立白水小学校発行)

当時、小学校4年生だった久野美恵子さん(10歳)が、涙を必死にこらえながら書き上げたものである。

(2016年9月23日)